

演劇手法を用いたコミュニケーション力向上を目指して

岐阜医療科学大学長 山岡一清

岐阜医療科学大学は、昭和 48(1973)年 4 月に国際医学総合技術学院を設置し、臨床検査技師養成を開始、昭和 49(1974)年には診療放射線技師の養成を開始しました。その後昭和 58(1983)年に岐阜医療技術短期大学(衛生技術学科・診療放射線技術学科)を開学、平成 3(1991)年には看護学科を開設して現在の基礎を築きました。さらには、医学の進歩と相まって医療技術者の高学歴化が進み、社会のニーズと医療現場の要請に応じるため、平成 18(2006)年、高度な医療技術者を育成する高等教育機関として岐阜医療科学大学を開学しました。

上述の 3 学科の教育は関市のキャンパスで行ってきましたが、薬学部開設構想を機に、平成 31(2019)年 4 月可児市に新キャンパスを整備し看護学部を移転させ、さらには令和 2(2020)年 4 月新たに薬学部を開設、第 1 期生の入学生を迎えるました。

薬学部の教育カリキュラム検討において、地域医療の現場で活躍できる薬剤師を目指すため、コミュニケーション教育の充実を 1 つの柱に据え、本学専任教員が行う医療コミュニケーション教育に加え、可児市文化創造センター衛館長の協力のもと、岐阜県内の高校で教育実績のある、演劇手法を用いたコミュニケーション力向上を目指した教育を、劇団文学座と協働して行う科目を取り入れることになりました。

高いレベルのコミュニケーションスキルを持ち、地域医療を支える担い手として活躍できる薬剤師の養成を目指します。今後は、可児キャンパスで教育を行っている看護学部でも同様のコミュニケーション教育の導入を検討していく予定です。

岐阜医療科学大学と文学座の提携に際して

株式会社 文学座

代表取締役 田中章子

この度、医療現場に優れた人材を輩出している育成プログラムに演劇ワークショップが取り入れられることとなり、私共文学座をご指定いただきましたことに対し岐阜医療科学大学、関係各所の皆さんに心より御礼申し上げます。

文学座は 2003 年から演劇ワークショップを劇団事業の一環として取組んでまいりました。これが俳優育成に限らず様々な場面に効用をもたらすことは、2018 年岐阜県教育委員会と提携協力に発展したことから見ても確かな評価となっていると自負しています。

演劇が社会生活において掛け替えのない存在であることの一端が、この度の提携をもって皆さんにも周知されることを願って止みません。

また多岐に渡る活躍の場が与えられることで、私たち演劇人も自身の向上にさらに磨きをかけていきたい所存です。

演劇と医療がタッグを組む第一歩

演出家・日本劇団協議会長 西川信廣

この度、文学座は可児市に開校される、岐阜医療科学大学と提携を結び、医療教育の一貫に演劇的手法を取り入れた講座を持ち「人と人をつなぐ」ためのスキルアップを目指して共同して取り組むことになりました。文学座は20年以上前から、演劇で培った演劇の「智」と多彩な人材を活かすために、数多くのワークショップやアウトリーチを手掛けてきました。その延長線上に、可児市の文化創造センター・アーラと地域拠点契約をむすび、公演以外にも数多くのプログラムを共同で開催していました。その中で、2012年から御嵩町の東濃高校でのワークショップを始めました。その結果、約40人いた退校者が一桁になり、遅刻欠席が4分の1になり、その他の問題行動や不登校なども大きく改善される結果を生みました。それに続いて西濃地区の不破高校でも同じような結果を生むことが出来ました。その成果を踏まえて、2018年岐阜県教育委員会と提携を結び、現在14の県立高校で1年生を対象としたワークショップを開催しています。実施後、どの高校にも共通するのは、「相手の話を聞くこと大事さが分かった」「友達が出来た」「みんなの前で意見を言えるようになった」など仲間とのつながりができるようになったとの多数の声を得ることが出来ました。SNSの発達で、便利になった反面、対面して話したり、耳を傾けることが少なくなつたいま、改めてその大事さが見直されています。

医療の現場でも、必要なのは、人と人がつながるためのコミュニケーション能力ではないかと考えます。コロナ禍の今、人と人とのつながりの大切さが改めて認識されています。この提携が、医療技術をより生かすため、地域医療に貢献する人材の育成するための第一歩になると考えています。

岐阜医療科学大学及び劇団文学座提携契約について

可児市長 富田成輝

この度、岐阜医療科学大学と劇団文学座におかれては、医療分野での人材育成において提携される運びとなったこと、心からお慶び申し上げます。

岐阜医療科学大学が、本市にキャンパスを設けられたことを縁に、可児市らしさを備えたキャンパスとなっていただくことを願っておりました。これまで本市の文化創造センターと文学座とが中心となって、演劇の手法を取り入れた人間教育に取り組んでまいりました。この手法が貴大学において実践いただけることで、更なる進化を遂げていくものと確信しています。

貴大学可児キャンパスで学ばれる学生の皆さんに、医療に関わる高度な知識や技術に加えて、温かみのあるコミュニケーション能力を身に付けることで、医療現場において、そして社会を支える人材として活躍されることを願っております。

さらに貴大学の取り組みが、人材教育の新たなモデルとして、全国に発信されいくことをご期待申し上げ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

可児市文化創造センター 前館長 衛 紀生

館長エッセイ

(2020/11/9 第218回 この国を「人間の家」にするために」より抜粋)

岐阜医療科学大学での、文化芸術を活用しての、2年次、3年次の薬学部の学生対象の「演習」が来年度から始まります。東濃高校の成果に聞き及んで、今年度から名城大学跡地に移転して薬学部を併設して開学した岐阜医療科学大学の学長をはじめとする理事・執行部からの依頼で一昨年から取り組みを始めたものです。富田市長から今後重要となる「地域医療」と「地域介護」の担い手を育成して、その充実を図る目的を持つ大学と聞いて、それならばお手伝いできることがあると考えての参加の決断でした。私は病気を治療するところが病院であり、身体的機能の不全をケアするところが介護とは思っていません。罹患した箇所を見て治療して完治させるのが医療の唯一の使命とは思わないし、機能不全をサポートすることのみが介護とも思っていません。

それらを含めて「〇〇さんらしさ」を取り戻す、キープマネジメントこそが、すなわち全人格的な医療と介護こそが根幹的な使命なのではないかと考えていました。だとすると、当事者の「生きる環境」を整える仕事こそ、医療であり介護なのではと考えて、ならばコミュニティ形成機能と「つながりの回復と醸成機能」のある文化芸術は最適解と言える、とありがたい申し出をお引き受けしたのです。そういう私の考えも、大学関係者と共に感・共鳴して共有することができました。世界的に稀有な事例となると学長から聞きました。近く大学側と詰めを行って、東濃高校の時のように文学座の

稽古場での記者発表をすることになります。医療介護への文化 芸術のマッチングは、仙台富沢病院での認知症改善の東北大学藤井昌彦教授の「演劇情動療法」の試みがあり、私も末席でサポートさせてもらっていますが、私たちのチャレンジが、医療介護の公的資金の抑制に働くとの政策エビデンスにつながれば、文化芸術と劇場音楽堂等の公共的役割と文化政策の総合政策化へのコンセンサス形成の一助となると大いに期待しています。